喜多原だより

ＮＯ．７７号　　令和４年３月吉日発行

～園長　大鶴憲司～

ひところ落ち着きを見せたコロナ感染症は、年明けに猛威を振るいはじめ、この原稿を書いている今、鳥取県内でも連日危機感に包まれた報道がなされている。

本来ならばにぎやかであろう年末年始の米子市は、コロナの影響で自粛が続き、自宅近くの皆生海岸も静かな時間が流れた。二度目の正月を迎えたわけだが、一年を振り返ってみた。

今年は一年遅れのオリンピックイヤーだった。聖火リレーが鳥取県にもやってきた。オリンピックでは、米子市出身の選手が活躍した。女子ボクシングの入江選手の金メダルには地元は大きく盛り上がった。

東京オリンピックのころ、中国地区の野球親善大会は山口県で行われた。喜多原学園は二勝することができた。小学生が多い中、快挙といえる。驚くほど広いドームの球場で緊張と暑さの中での接戦。子どもたちが、ひとまわり逞しさを増す貴重な経験となった。

秋には、コロナの第五波がやってきた。喜多原学園でも児童のワクチン接種が行われた。

中国地区の女子のバレーボールは一勝一敗。これも接戦を制して価値ある一勝だった。四人の戦いは、春から始まっていたように思える。「どんな時も笑顔」が合言葉だった。実のところ、緊張に震え、涙をこらえ「笑顔、笑顔」と声を掛け合っての戦いだった。

小学六年生と中三生は、修学旅行が実施できた。水族館や出雲大社、松江の城下町を楽しんだ。いつもは見せないさりげない気づかいややさしさに、子どもたちの新たな一面を見ましたとの報告に、うれしく、また頼もしく感じた。

駅伝は、中国地区大会は集合せず、各施設の記録を持ち寄る形態だった。喜多原学園は大山町の競技場を借りて記録会を行った。晴天に恵まれ広い競技場での記録会は、それにふさわしい緊張感が充分にあり、いつも以上の実力が発揮された。

秋の参観週間の太鼓の練習は夏休み明け新学期から始まった。丁寧なソロパートで始まり、迫力ある大きな響きは全員で作り上げた“音”だった。太鼓と同時期に始まったダンスは、今年もノリノリで楽しそうな発表だった。ほのぼのとした小学生の「ごんぎつね」の発表など、どれも先生と子どもたちとの日常をそのまま表していた。

一年を振り返り、どの行事を振り返ってみても、担当した先生、監督した先生と子どもたちの関係が、素晴らしい出会いだったなと思う。学園の役割は、こうした人たちとの出会い、やったことのない野球やバレーボールなどの体験をすること、または経験してみることにもあるなと思う。そしてそうした経験は、これから出会うであろう人たちと、意味のある出会いにするためのお手伝いなのだろう。それが自立支援なのかなとも思う。

人生を大きく変える出会いや感動のために、いい準備をする。大切な出会いを見逃さない。本物を見る目と「こころ」を養い、そして本物を求めて新しい世界に飛び込んで行ける知識と「こころ」を養う。

今、次のステージへ向かい、新しい出会いの準備を整える時期かなとも思う。またそう願いたい。

クリスマス会

～女子寮副寮長　小谷智志～

十二月二十四日に、クリスマス会を開催しました。コロナ禍のため、皆で一同に会しての会食会は出来ませんでした。が、厨房業者（広鉄二葉サービス）のご協力の元、子ども達は、クリスマスチキンやドリアなど、リクエストした豪華なメニューを堪能しました。

午後からは、待ちに待った、毎年恒例の出し物発表の時間です。ジャンルを問わず、出演者を募集したところ、歌・ダンス・バンド演奏・寸劇・刀剣の披露・クイズなど思考を凝らした出し物がたくさんあり、楽しい時間を共有しました。もちろん、児童のみならず、分校職員や寮職員も、会場の盛り上げ役として一役を買いました。

出演した児童達は、みんなの前に立ち緊張している様子も窺えましたが、この日までに仲間と一緒に練習に励み、本番では、堂々とやりとげていました。会場からの拍手喝采は、かけがえのない喜びと達成感に変わったことでしょう。

クリスマス会の最後には、園長扮するサンタクロースから子ども達一人ひとりにプレゼントが手渡されました。学園生活での楽しい思い出の一ページとなれば幸いです。

児童作文

～中学生女子児童感想～

私は、今年で二度目の喜多原学園のクリスマス会でした。私は、みんなの前に出て特技を披露する事が得意なので、クリスマス会は凄く良い機会です。

今回は、ダンスと歌とドリフの早口言葉を披露しました。最初は歌を歌うペアの子とトラブルが起こったりしました。

でも、当日までにしっかりと話しをして、トラブルを解消させて本番は楽しく出来たので、よかったです。

～小学生女子児童感想～

私がクリスマス会で心に残ったことは、全部です。みんな楽しそうだったし、一人ひとりが、出し物を一生懸命していて、良かったです。男子寮のバンドなど、ものすごく、かっこよかったです。

昼食なども、ごうかでおいしかったです。私も、自分の出し物が成功するのか、不安だったけど、楽しかったので、そんなことどうでもよかったです。

餅つき

～男子寮　西尾弘規～

喜多原学園は恒例のもちつきを実施しました。地域住民の方々のご協力を得て作ったもち米を使用しました。参加した男子寮、女子寮、学園職員、分校職員の全員がもちをつきました。もち米の量が多く、なかなか時間はかかりましたが、臼でついた時の周りの掛け声が力になり、最後まで楽しい行事となりました。男子がついて女子がこねるのではなく、男子も女子もついてこねて、児童たちはいろいろ感じたものがあると思います。実際につきたてを食べると「おいしい」「うまい」の声で溢れていました。子ども大人の笑顔を見ると行事主査としてよい行事になったなと感じることができました。もみまきから始まった米作り体験が終了しましたが、児童たちは米作りの大変さ、食べ物の大切さ、そして達成感を感じてくれたのではないかと思っています。

とんどさん

～男子寮　光宗哲平～

年末帰省が終わり、どことなく正月気分が抜けない子どもたちの今年最初の行事が始業式からのとんどさんになります。今年は私が作成した餅を挟むための竹が短く、少し心配していましたが、自ら竹を繋ぐ強者も現れており、各々創意工夫しながら餅を焼き、蜜柑を焼き、楽しんでいました。

子どもにとって燃え盛る炎はそれだけで見ごたえがあり、盛り上がる行事ではありますが、楽しんではいるものの、意外にとんどさんの由来を知る子どもはおらず、蜜柑を食べながら意味を知ると、もっと食べると意気込む子どももいて微笑ましく思いました。

一年の最初の行事として、寮生と炎を見ながら楽しんで喜多原学園に帰ってきたことを実感し、新しい一年の目標をもって寮生活に励めたらなと思いつつ、とんどさんという伝統文化を子どもたちに伝える行事として、来年も同じように子どもたち炎を囲みたいと思いました。

男子寮一年の振り返り

～男子寮長　内藤和宏～

一年間を振り返ってみると、小学生児童の入所が多くなり、寮の支援体制も、家庭的な支援をどう構築していくかを児童、職員ともに考えた一年間だったと思います。

まだ、手探り状態ではありますが、その支援体制構築に向けて、ハード面、ソフト面において児童の対応への変化の必要性も求められた中、チームとしての成長も感じ、成果として表れ始めきているという実感も得始めています。

今後も、チームとして時代の変化に対応しながら、地域のニーズに応える寮運営をしたいとますます感じた一年でした。

女子寮一年の振り返り

～女子寮長　尾澤理子～

日々子ども達の支援にご理解とご協力をいただき、本当にありがとうございます。田中前園長、大鶴現園長が学園理念として掲げておられる「子どもが自立し、社会と調和して生活することを支援する」ことを実際の寮支援に反映させるため、寮長として四年務めてきました。個別支援と集団支援のバランスを大切にしながら、子ども達が自らの生活を作り上げていくというところに重きを置き、常に子ども達と職員との話し合いを通して、全員が気持ちの良い生活とは？を焦点として考える事を継続してきました。様々な事情で入所していますが、社会の中で調和するためには他者視点を養うことは必須だと考えています。子ども達の見えている世界が、少しでも生きづらいものにならないように、私たちの出来る事は限られていますが、今後も精一杯毎日を共に過ごしていきたいと考えています。

冬の思い出写真館

初詣

クリスマスケーキ作り

お点前披露

スキースノーボード体験

受験勉強

令和３年度　　喜多原学園今後の行事予定

３月　　卒業式（中学生３名、小学生３名）、離任式

児童在籍情報

	小学生		中学生		中卒生		合計	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
R３　４月１日	３人	２人	５人	１人	０人	１人	８人	４人
R３　９月１日	３人	２人	７人	１人	０人	１人	10人	４人
R３　12月１日	３人	２人	８人	１人	０人	１人	11人	４人
R４　３月１日	３人	２人	８人	１人	０人	１人	11人	４人

編集発行

鳥取県立喜多原学園

鳥取県米子市泉７０６

TEL　0859－27－1101

FAX　0859－27－1611

編集後記

２０２２年の干支は寅年です。「寅」という字には動く、と言う意味があるようです。いまだ、世間ではオミクロン株の感染が広がり、連日多数の感染者数が報道されています。

コロナ禍ではありますが、様々な行事・活動を全て止めてしまうのではなく、引き続き感染予防対策を十分に行った上で“子ども達と一緒に動き出せる”、そんな１年にしていきたいと思います。